

被災地での宿泊研修—復興支援ボランティア

漁業支援、農業支援（Aグループ）

Aグループは、漁業支援と農業支援を行いました。漁業支援では、養殖設備を全て津波で失ってから事業再建までの道のりを伺うとともに、養殖に使うロープの準備や重しづくり等を行いました。農業支援では、震災で職を失った方のために地元の雇用創出を第一に考えるという経営理念を伺った後、菊のビニールハウス内の整備をお手伝いしました。

漁業支援 金比羅丸



漁業支援ではまず、金比羅丸代表の高橋 直哉さんの講話を伺いました。ホタテ・カキ・ワカメの養殖設備を全て津波で失った高橋さん。当初は漁業再開まで2年かかると言われたそうですが、全国から集まったボランティアの力で浜のがれきが撤去され、震災の年の秋にはワカメの養殖が再開できたそうです。収穫したワカメをボランティアの人たちにふるまったところ、「おいしい!」と喜んでくれたことに、高橋さんは漁師としての誇りを取り戻したということでした。そして、自分たちが獲った海産物の直販や、「漁業体験」や「手ぶらフィッシング」など観光客向けの事業も新たに始めました。

「震災後の生活で、自分は多くの人との関わり合いの中で生きているということを学びました。みんなで支え合えば、困難も乗り越えることができます」と、高橋さんは語ってくださいました。





この日は海の状態が悪く、予定していた漁船に乗っての養殖場での作業は中止になり、代わりに、高橋さんや御両親とともに、養殖に使う様々な道具の準備や設備づくりを行いました。



ホタテを留めるピンをロープに挿す、園芸用ポットにセメントを入れて小さい重しを作る、袋に砂利を詰めて大きい重しを作る……。参加生徒らは、これらを手作業で行いながら、設備を失った被災地の漁師さんたちの大変さと、協力することの大切さを実感しました。



**金比羅丸
代表取締役 高橋 直哉さん**

今回の作業を通して、東京の高校生や先生方に何かを感じてもらえたらと思います。私も今回の御縁を大切にしていきたいです。

農業支援 株式会社 小野花匠園



農業支援ではまず、(株)小野花匠園 代表取締役 小野政道さんに、震災当時の様子や震災後に会社を立ち上げた経緯、自宅を避難所としたこと等をお話し頂きました。

地震の後、自宅を避難所にし、近隣の4家族と3か月生活をともにしたという小野さん。その人たちと励まし合ったり、震災で職を失った人たちを見たりするうち何かできないかと思い、それまで家族経営だった自らの農園を法人化したそうです。

菊栽培だけでなく花束への加工を新たに始め、近隣のコンビニ等に花束を卸す等、販路を拡大することで人を雇っていきました。社員の神成和彦さんは震災で以前の職を失い、初めて花の仕事に就いたそうですが、「仲間も取引先ももっと増やしていきたい」と前向きな思いを語っていただきました。



その後ビニールハウスに移動し、収穫後の畑に残った菊を抜き取る作業を行いました。「ものすごい重労働！」などと感想を漏らしながら、参加者は作業に集中。また一部の生徒は小野さんの指導で、翌日に南三陸町旧防災対策庁舎に献花する花束を作りました。



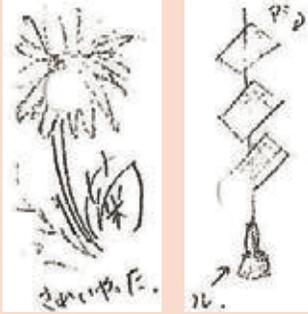
(株)小野花匠園
代表取締役
小野 政道さん

震災で改めて花の持つ役割を考えるようになりました。皆さんも、災害が起きたら「自分に何ができるか」を考えてもらえればと思います。



被災地での宿泊研修

復興支援ボランティア（漁業・農業）の参加者感想

<p>体験してみて思ったことは、まだまだ自分たちがボランティアの一員として手伝えることはたくさんあるということ。今日、自分たちはたくさん仕事を与えてもらった。ということは、自分たちができることはたくさんあるということ。私はそのことをほかの人にも伝え、自分でもできることを探し、少しでも被災者の方と一緒に楽しい時間を過ごしたいと思った。</p>	<p>生徒</p>
<p>(農業支援) いい汗かいた。たくさんの菊をとったが、ビニールハウスの中でもあんなに不良品があるとは驚いたし、もったいなくも感じる。だが、花は見た目命だから仕方ないのかも思えてくる。中腰姿勢ですっとやるのはなかなかきつい作業ではあったが、とても充実した時間を過ごすことができた。“はるちゃんトマト”、まじ美味かった。最高。甘いし。 (漁業支援) セメントを使った重しづくりはハードでつらくはあったが、心地よい風が吹く中で、楽しかった。腰がやられる。それ以上に、腕もやられた。明日握手できるか不安・・・。</p>	 <p>生徒</p>
<p>(漁業支援) 重しづくりのお手伝いをした。石の粒も大きくて泥も含まれていたのもとても重かった！袋の準備から締め上げるまでを主にやったが、紐を締めるのも力がとてもいるし、砂利を整えたり移動するのも袋が重すぎて持ち上がらなくて大変！震災前は機械でやっていたそうだが、その機械が流されてしまい、今は人の手で一つずつ！本当に大変!! 腰や腕を痛めてしまいそう!! セメント詰めのお手伝いは、セメントを入れているうちに紐が傾いてしまっとうまく立たず、微調整が必要だった。コツはひもの周りからセメントを入れ、周りから固めて固定することで直立してくれる!! と分かった。</p>	 <p>生徒</p>
<p>(漁業支援) 再開まで2年かかると言われていた漁業は、地元の方とボランティアの協力で、その年の秋には再開できたと聞き、人と協力することは本当に大切なのだと思った。</p>	<p>生徒</p>
<p>(農業支援) 比較的海から離れたところではあるが、震災時、川を津波が遡って、建物や様々なものが流れ着いて驚いたという話や、多くの被災した方々を迎え入れて私設の避難所となって活動される中で商業観が変わり、自分たちが食えれば良いという考え方から多くの雇用を生み出し人々の生活を支えようという考えになっていったという話を伺った。 (漁業支援) 震災直後、職を失い、震災の年の秋頃からワカメの養殖を再開。小野花匠園と通ずる点もあったが、震災を通じて仕事のやり方を従来の枠組みから離れて、大きく変えることとなったとのこと。ともに震災を通じて、その後「職業」の在り方について、考えが大きく変わったというお話だったように思う。「自分さえ食べられれば良い」という考えから、雇用の創出を通じての地域復興の支援等に、自分から地球へ、結果として震災が大きく目を開かせるような働きをしたということに驚きをおぼえた。</p>	<p>教員</p>
<p>(農業支援) 震災に直面し、自分の周りに避難してきた方との共同の避難生活を始める中で、どのように自分が震災と関わるのか、地域と関わるのかを考え、一歩ずつ踏み出したストーリーを聞くことができた。 (漁業支援) 震災後、ボランティア活動に訪れた方々との触れ合いの中で、漁業の現場以外にいる消費者の何気ない感想や行動を見逃さず、新たな事業として進めていく力強さを感じた。自らが販路を見だし動いていき、少しずつファンを増やしていく。どのようにすれば収益性を高められるのか、生産現場の方々が真剣に考え、それを形にしていける姿は高校生にとって刺激になったと感じる。</p>	<p>教員</p>

被災地での宿泊研修—復興支援ボランティア

林業支援、物販支援（Bグループ）

Bグループは、林業支援と物販支援を行いました。林業支援では、森の大切さを学ぶとともに、汗を流して木々の伐採のお手伝いを、物販支援では震災後、生きるために立ち上がった女性経営者に起業の経緯を伺った後、商品づくり等のお手伝いをさせていただきました。

林業支援 南三陸森林組合、入谷 Yes 工房



南三陸森町入谷公民館 館長／入谷 Yes 工房 事務局長
阿部忠義さん



林業支援では、最初に南三陸森町入谷公民館 館長／入谷 Yes 工房 事務局長 阿部 忠義さんの講話を伺いました。南三陸町役場にお勤めだった阿部さんは、多くの仲間を東日本大震災で失いましたが、南三陸町の復興のために尽力されてきました。

“笑いで社会を明るく元気にする”新ビジネスをいくつも立ち上げ、被災した方々の居場所や、生き生きと働ける環境づくりを行っています。



講話の後、全員が長靴に履き替え、南三陸森林組合 参事 山内 日出夫さんの案内で、山に入りました。

林業は南三陸町の重要な産業であるとともに、“漁業を支える海”に栄養豊富な水を供給し、Co2 削減にも貢献しています。

また南三陸町では、南三陸森林組合と民間企業が協力し、約 10 ヘクタールの森を整備し、森から出る間伐材でグッズを製作することで、新たな雇用も生み出していることを説明頂きました。



山中では、班ごとに分かれ、木々の間伐や、枝打ちを体験しました。伐った木材は、それぞれが記念に持ち帰りました。

この体験後、ある教諭は「のこぎり、バール、ジャッキは何か起きたときに防災士にも必要となる道具。その使い方も学べる機会でした」と語っていました。

昼には入谷 Yes 工房へ移動。主に企業からの依頼で、木材を用いた商品の開発・製造を行っていることや、キャラクターグッズの販売・PR 等で、南三陸を盛り上げていることを伺いました。



南三陸復興ダコの会
広報・デザイン
大森 丈広さん

入谷 Yes 工房では、レーザー加工を使って地域素材であるスギのグッズ製作を行っております。それが地域のPRにつながっているということを、東京の高校生みなさんに知ってもらえました。みなさんが、また東北に遊びにくる機会があれば、是非、南三陸町に寄ってください。南三陸町内の山・川・海、たくさんの自然で、体験や観光をしてほしいと思います。

物販支援 たみこの海パック



物販支援では、海産物を“売る”事業を立ち上げた、「たみこの海パック」の代表 阿部 民子さんに、震災時のお話と、起業の経緯を伺いました。津波で地区の多くの漁場や工場が流されてしまい、どうやって生きていこうかと考えた時に、様々な方の応援があってこの事業を始めたこと等のほか、津波で流されてしまった方を目の当たりにしたつらさ等、この日初めて語られた内容もありました。

乾物（ワカメ）袋詰めや、阿部さんの御主人が行うカキ養殖の種付け作業準備等を手伝いながら、“前を向いて歩き進むことの大切さ”を、お二人から教えていただきました。



たみこの海パック
代表
阿部 民子さん

高校生の皆さんが、楽しそうに一生懸命に作業をしてくれたこと、それがとてもうれしかったです。震災当時の話や私の実体験を話すことで、皆さんそれぞれ何かを感じ取ってくれたことと思います。これからも、いつ何が起きるかわかりません。皆さんには“(私たち)被災地・被災者のこと”よりも“震災があった”という事実こそを、忘れないでいてほしい。そして“自分の命は自分で守る”ということ、一人では何もできない場合もあるから“人と人とのつながりを大事にしていく”ということを忘れずにいてほしいと思います。



ボランティア
コーディネーター
一般社団法人
復興応援団代表理事
佐野 哲史さん

漁業、農業、林業、物販と、皆さんが今日会った方々は、ゼロではなくマイナスからの挑戦をしてきた人たちです。その人たちの生きる力が高校生の皆さんにも伝わったのではないのでしょうか。復興の現状を是非、周囲の人へも伝えてあげてください。

被災地での宿泊研修

復興支援ボランティア（林業・物販支援）の参加者感想

<p>ワカメの袋詰めと林業で木を伐る体験をしたが、これらの活動を始めた方々の思いを感じた。つらく大変な思いをしているのに、自分のためでなく誰かのために活動している方々が本当に強いと思っし、テレビでしか（被災地の状況を）分からなかった私たちが、率先して被災地の方々を支えることが大切であることを知った。</p>	生徒
<p>何人かの被災者がおっしゃっていたのは、「こんなことになるとは思っていなかった」ということで、震災がいかに想像を超えた力を持っていたか、どれほどの脅威を持っていたかが伝わってきた。南三陸森林組合や入谷 Yes 工房で話を聞いて、復興には様々な人の力があり、またそこには必ず「どうにかしたい」という第一人がいらっししたこと分かった。自分も「もしも」の時に限らず、普段から、正に防災の段階で、周りと意見交換等できるようにしたいと考えた。</p>	生徒
<p>「復興というのは、新しいものが作られていだけで、元々あったものが返ってくるわけではない」という言葉が心に刺さった。</p>	生徒
<p>(林業支援) 入谷 Yes 工房では、互いに協力している姿が分かった。組合で伐った木は廃材になるところ、工房でその木を用い、商品を作り販売することで、復興だけでなく、資源のムダを減らすという取組に驚いた。また、大人気のオクトパス君等、手作業の商品もあると知って驚いた。 (物販支援) 民子さんは、津波の恐ろしさから海に出られず、ほかにできることはないかと考え始めたとのこと。「みんな頑張っているから私も」と、考えられる気持ちが復興には大切なのだと感じた。皆さん、仕事の内容は違うけれど、早く復興したい、南三陸について学んでほしいと、とても前向きだった。たくさん勉強させていただいた。</p>	生徒
<p>(物販支援) 震災被害で、民子さん自身も沈んでいたのに、そこから立ち上がり、起業したのは本当にすごいと思った。民子さんの話では、テレビ等のメディアでは取り上げられていないけれど、災害で大切な人を失い、お酒に走ってしまい、ずっと苦しんでいる人がいるということも知った。入谷 Yes 工房の阿部 忠義さんのお話でも、「信頼できる仲間の支え」は本当に大事なんだと改めて実感した。何かあったときに、自分を助けてくれるのは仲間。また、仲間と連携するには、コミュニティづくりも大切だと思った。</p>	生徒
<p>(物販支援) 一つ一つが手作業で、30分もやっていないうちに腰も足も痛くなるほどの大変な作業だった。だからこそ、その商品を手にとった時に感じる何かがあるのだと思った。また、民子さんが「地震があったことを忘れられるのが一番辛い」とおっしゃっていて、確かに自分もこのキャンプがなければ東日本大震災を思うことはなかったかもしれない。こうした機会を通して、多くの人たちに現地の状況を知ってもらいたいと思った。</p>	生徒
<p>東日本大震災でゼロどころかマイナスからのスタートとなってしまったが、諦めずに新しいことに取り組む姿勢が大切であると分かった。働くことでさえ大変であるのに、被災した環境では、より資金や設備等様々な面で困ったことがあると思う。だからこそボランティアといった支援が被災地の復興に必要なと思う。ボランティアは現地へ行って仕事を手伝ったり片付けをすることと考えがちだが、現地へ足を運び、状況を自分の目で見て、その様子を周りの人たちに伝えることも立派なボランティアであると思う。被災地の復興を支援するには、何よりも現地に関心を持ち、自分に合った方法で行うことが大切だと思う。</p>	生徒
<p>(物販支援) 阿部民子さんの話を聞き、実際に津波を体験した方であれば語ることでできない津波の恐怖、当日まで元気であった御主人の御尊父様が犠牲になった経緯、そして集落で多くの方が被害に遭った中でも、「うちは DNA 鑑定をして遺骨が返ってきたからいいけれど、まだ行方不明者もいる」と御主人が言ったという、その言葉の重さ。心に突き刺さるものがあった。行方不明でいまだに捜索を続けている現状の背景を突き付けられ、まだ東日本大震災は終わっていないという実感を再認識した。</p>	教員